

豊かに発想・構想し、表現する力を育むための言語活動の充実

図画工作科・美術科研究会議

研究員 木村 光紘（川崎市立上丸子小学校）

石川 裕貴（川崎市立宿河原小学校）

川原 美奈子（川崎市立川中島中学校）

柳原 麻子（川崎市立中野島中学校）

指導主事 縄田 芳信

I 主題設定の理由

児童生徒が自ら主題を生み出し、つくる喜びを感じながら、意図的に表現活動に取り組むためには、「表したいこと」「伝えたいこと」「見てほしいこと」など、児童生徒一人一人の表現への思いを具体的に引き出すことが大切である。主題が明確で表現への思いが強ければ、その思いは必然的に言語として表れてくると考えられる。図画工作・美術科教育における〔共通事項〕の視点を生かして、言語活動を幅広くとらえ、学習活動に取り入れることは、発想・構想の能力を高め、自他の表現への理解を深め、より豊かな表現を展開できると考える。表現及び鑑賞双方を関連づけて指導を充実させるために意図的に言語活動を取り入れることは、豊かに発想・構想し、表現する力を育むと考えた。

II 研究の内容

1 研究の方法

児童生徒は頭の中のイメージを、形や色、文字や言葉、イメージマップなどで明確にしていると仮定した場合、グループや全体で交流することにより、思いが練り上がっていったり、一人一人の思いが明確になっていったり、思いを広げたり深めたりすることができると思う。言語活動を意図的に取り入れることによって、児童生徒の様子や表現に学習目標の実現が見られるのかを研究していく。

主題を見つけるための場面	思いを明確にするための場面	よさや美しさを感じる場面
<ul style="list-style-type: none">・ <u>主題を見つけるための言語活動</u>・ <u>思いを引き出すための言語活動</u>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>学びの継続のための言語活動</u>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>思いを形にするための言語活動</u>・ <u>自己肯定感を満たすための言語活動</u>・ <u>よさを理解するための言語活動</u>

表現と鑑賞を、常に関連付けて指導することを重視し、場面に応じた言語活動を意図的に取り入れることは、児童生徒にとって、より効果的に学習目標にせまれると考える。イメージマップ、アイデアスケッチ、作品自体への思い（思いの交流）、話し合い、作品の説明文など、言語活動は様々である。また、グループや、全体で交流する場面などが考えられる。ほかにも教師が意図していないところにも、児童生徒の言語活動場面があると考えられる。今回は、教師側が上記の3つの場面において意図的に言語活動を取り入れることによって、児童生徒に、豊かに発想・構想し、表現する力を育むことができると仮定し、授業の様子や、作品、ワークシートの記述、児童生徒の自己評価等から検証・分析を行い、より効果的な言語活動について考える。

2 検証授業

(1) 美術科 中学校 第1学年 「3本の線で」

○題材のねらい

色と配色について知り、そのきまりを理解し、テーマに合わせて線と面を使って自分の表現意図に合う構成と配色を工夫し、創造的に表現する。

また、他者の作品から作者の意図を感じ取り、創造的な表現の工夫やよさを味わい、鑑賞する。

○場面における生徒の学び

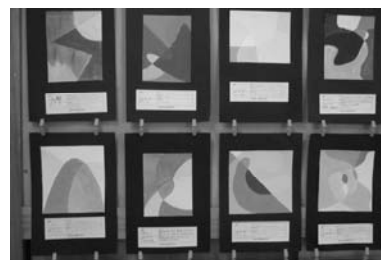


図1 生徒作品

＜主題を見つけるための場面＞	＜思いを明確にする場面＞	＜よさや美しさを感じる場面＞
<p><u>グループでの交流</u></p> <p>参考作品を提示し、3、4人の少ない人数で交流させることで、自分がつくる作品に対する思いをふくらませることができた。形や色などの表現の仕方や、それぞれの作品を見たときの感じ方の違いなど、自分になり考えにも触れ、課題の理解が深まり、意欲を広げている様子だった。また、自分のテーマを全体に交流させることにより、自分のイメージを広げたり固めたりすることができた。</p>	<p><u>アイデアスケッチ</u></p> <p>自分の決めたテーマを書かせることで、イメージを広げ、整理をしようとする姿が見られた(イメージマップの活用)。一人一人にテーマを発表させることで、思いが明確になっていた。アイデアスケッチを何枚も描かせることで、イメージを固めていくことができた。また、友達のイメージマップを見ることで、発想をふくらませている生徒の姿も見られた。</p>	<p><u>鑑賞</u></p> <p>最後の作品鑑賞では、一人一人に自分の作品を紹介する発表原稿をつくらせ、班ごとに話し合うようにした。自分の作品について項立てて話をつくり語らせることで、聞き手は作り手の意図を知り作品の見方を知った上で鑑賞することができた。また、グループの中でも自ずとよいところを話し合う姿も見られ、作品について共感していた。</p>

○アンケート結果より

表1 アンケート結果

参考作品を見ながらの話し合いは、クラスの大半が「役に立った」としている。参考作品からテーマについて理解したり、イメージをわかせたりすることにとっても効果的であったことがわかる。「あまり役に立たなかった」と答えている生徒はみな「すでに自分のつくりたいものを考えていた」と答えている。また、グループで取り組むことで、アドバイスし合ったり、作品を見合ったり、作品の話をする中で、思いをふくらませている様子も見ることができた。生徒も友達と交流することでより関心をもち、学び合いを通して、イメージをもったり、発想・構想の力を高めたりしていた。

<p>1. 参考作品を見ながらの話し合いは、<u>あなげ</u>にとってどのように役に立ちましたか。</p> <p>①役に立った 18名 ②やや役に立った 12名 ③あまり役に立たなかった 5名 ④役に立たなかった 0人</p> <p>2. その理由は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマで悩んでいるときに話し合ったので、アイデアが浮かんできた。 ・作品を見ることでイメージが定まった。 ・線の形がその絵のイメージを決める1つの大切なことなのかなと思った。 ・テーマに沿って色をまとめること、配色がとても大切なことを学んだ。 <p>3. 作品のアイデアを考えると<u>参考になったこと</u>や<u>きっかけ</u>はありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・隣の友達の考えを見たり聞いたりすることで、つくりたいものからくんだ。 ・参考作品から、色や形、テーマなどが参考になった。
--

(2) 図画工作科 小学校 第5学年 「線を集めて～自分だけの建物をつくらう～」

○題材のねらい

線が集まると立体になることに気づき、線材の組み合わせ方やつなぎ方を試しながら、自分が美しいと思う立体に表す。



図2 児童製作風景

○場面における児童の学び

<主題を見つけるための場面> 鑑賞	<思いを明確にする場面> グループでの交流	<よさや美しさを感じる場面> 鑑賞
<p>鑑賞は、特に、手が止まっている児童にとって効果的な手だての一つであった。途中で鑑賞を入れ、多方向から見ることや見ていくポイントを知らせることで、授業の後半に行われる鑑賞の活動に生かされていた。また、鑑賞の能力を育むことができる。友だちの制作途中の作品を見ていることで、完成したものを見たときの感動や驚きも生まれた。</p>	<p>4人1組でつくらせることで、自然に近くの友達同士で作品を見合い、アドバイスをする姿が見られた。友達にアドバイスを受けて、自分のイメージをよりはっきりさせた児童や友達に質問をしてアドバイスを受けて、自分の思いを表現できた児童、友達の言葉から自分の表したものの主題に気付く児童がいた。近くの友達と話をしたり、関わり合ったりすることで、主題をはっきりさせたり、思いを明確にしたりすることができた。児童の成長によっては、作品を褒め合うことができるようになり、自己肯定感を育てることもできるだろう。</p>	<p>鑑賞をする際、児童には作品を見るだけでなく、題名や作品紹介の文を読ませた。特に題名は、自分のつくってきたことを一番伝えようとしている主題である。作品から感じ取れなかったことを題名や作品紹介から感じ取ることもできる。自分の考えをもち、友達と伝え合い、文章に書かせることで、自分の考えをより明確にしていった。また、友達と作品を見合うことで、交流が行われた。交流していく中で、友達のよさを見付け、それを伝え合うことで、自分の作品のよさにも触れることができ、自己肯定感を高める姿も見られた。</p>

○アンケート結果より

表2 アンケート結果

作品をつくる際、イメージを広げるときに参考となっていることとして、3分の1の児童は「友達からのアドバイス」「友達の作品を鑑賞したとき」と答えている。また、グループ活動を取り入れることは、多くの児童が「よかった」と答えている。言語活動を充実させることで児童は、友達の意見や作品からイメージを広げたり固めたりして、よりよい作品にするための手がかりとしている。また、褒め合ったり、励ましあったり、自分の作品に自信をもったりしながら学習に意欲的に取り組んだ。しかし、思いが強い児童にとって、意図的に言語活動を取り入れようとしても、子どものつくりたいという思いがふくらんでいるときには効果がない場合もある。時と場面に応じて言語活動を取り入れる必要があることがわかった。

<p>1. 作品づくりでイメージを広げるとき参考になったことは何ですか</p> <p>①テレビの画面や写真で見た建築物 (3名) ②参考作品 (2名)</p> <p>③友だちからのアドバイス (5名) ④途中で友達の作品を鑑賞したとき (5名)</p> <p>⑤元から自分のイメージが違って、変わることはなかった。(8名) ⑥その他 (4名)</p>
<p>2. 今回は、4人のグループで作業をしました。そのことはあなたにとってどうでしたか。</p> <p>①とてもよかった 16名 ②よかった 8名 ③グループでよい方がよかった。1名</p> <p>① ②で出た理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループの中でいろいろアドバイスをしてくれたのでよかった。 ・友達と話し合うことでイメージしやすくなるし、楽しく作れた。 ・友達の作品を見て、「こうしたらいい」とわかったから。 <p>③で出た理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人のほうが集中できるから ・気が散って集中できない
<p>3. 友達のアドバイスで「なるほど!」と思ったことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボンドの付け方や、ボンドが乾かすときはいしほもを使うとよいことを教えてもらった。 ・友達に「〇〇してみたら?」とアドバイスをもらった。

(3) 美術科 中学校 第3学年 「15歳の自分」

○題材のねらい

今ここにいる自分をしっかり見つめ、感性や想像力を働かせ、これまでの成長や将来の夢などをもとに主題を生み出し、ひとつの作品としてまとめ、「15歳の自分」を創造的に表現する。



図3 生徒作品

○場面における生徒の学び

<思いを明確にする場面>

毎時間の振り返り

毎時間、活動の終わりに振り返りを書かせることで、その時間に自分が頑張ったことを再確認し、次回取り組む活動を整理することにつながった。授業開始にその振り返りを読ませることで、前回のことを思い出し、継続しながら活動を進めることができた。

グループでの交流

生活班で活動を行わせた。制作する友達の作品を参考にしたり、教え合いや学び合いをしたりと、進んで関わる姿が見られた。また、近くの友達と活動中に作品について話すことによって、表現の多様性に気づき、自分の作品に生かす生徒も見られた。

<よさや美しさを感じる場面>

鑑賞

友達の作品について話し合ったり、付箋によさを記して渡し合ったりする場面を設定した。友達の作品を鑑賞していく中で、自分にはない表現方法を目にし、自分の表現の幅を広げたり、自分の気付かなかったよさを友達の感想から感じ取ったりしていた。作品に対して他者と自分の見方の違いに気付かせ、自分の作品に対して自信をもたせることができた。

○アンケート結果より

生活班での活動は、身近な友達からアドバイスだけでなく、ほめてもらうなどの様子も見られ、近くの友達と交流しながら自信をもち、表現の力を高めていった。鑑賞会では、批評し合うことで、作品の見方の幅が広がっていった。友達に感想をもらうことで、自分の表現のよさや美しさを再確認し、自己肯定感を高めることができていた。

表3 アンケート結果

1. 授業の振り返りを書くことは、自分にとってどのような力を育んでいると思いますか？
 - ・自分が次に何をしたいかを考える力が付く。(見直しをもつ)
 - ・その日、自分がやった活動、作業を確認することで、見直しする力が付いた。
2. 制作中に生活班をしたことは効果がありましたか？
 - ・他人のよいところを自分でも使ってみたいと思い、自分の作品に生かした。
 - ・互いの作品を見せ合い、アドバイスすることができた。
 - ・気が楽になった。 ・一人のまうが集中できた。
3. 制作中、他の人からかけられた言葉で、自分自身にプラスになったことを教えてください。
 - ・「マーブリング」がカッコいいと言われ、自分の作品をよりよくしようと思った。
 - ・「こういう表現もいいと思うよ」と言ってもらい、表現方法がまた増えたと思った。
 - ・「この部分はこれで作ったら」など、材料の色合いや形などについて言ってもらった。
 - ・「他の方法があったんだ」と多様な接着の方法を知った。
4. 鑑賞で、他の人からかけられた言葉で、自分自身にプラスになったことを教えてください。
 - ・自分の作品に対して、自分の意図と違った、他人の見方やとらえ方が参考になった。
 - ・自分が頑張ったところを褒めてもらえたり、友達の作品を共感したりすることができた。
 - ・自分でも気づかずにあったことを気付かせてくれて、表現の幅が広がった。

Ⅲ 研究のまとめ

場面に応じた言語活動を取り入れることで、豊かに発想・構想し、より主題に迫った作品をつくることができた。また、鑑賞活動の中で友達とお互いの作品を交流することで、作品のよさに気付くだけでなく、自分のよさに気付いたり、自己肯定感を高めたりしている姿も見られた。言語活動を取り入れた学び合いのある学習は、特に「努力を要する」状況と判断した児童生徒に対する手立てとして有効であった。より学びの質的な高まりをめざすためには、適切な場面に効果的に言語活動を取り入れることが教師に求められる。授業の中で言語活動を充実させ、学習目標を実現させるためには、児童生徒の思いに寄り添い、一人一人の様子や取り組み状況をより注意深く見取ることが大切である。今回の研究は、授業を検証していくことで、より学習の効果を高められる場面を明らかにし整理することができたことが成果であった。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、また、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様には、心からお礼申し上げます。

【参考文献】

佐藤 学「教育美術」教育美術振興会

2012年7月号

【指導助言者】

川崎市立小学校図画工作科研究会長（川崎市立真福寺小学校校長）

橋本 文恵

川崎市立中学校美術科研究部会長（川崎市立玉川中学校校長）

川合 克彦